

● 伊藤 一彦 選

ただ一校除き三千余校みな負けねばならぬ高校野球
をさなごの毛筆の「いし」転がれず朱の花丸がぐるぐる囲む
大いなる日傘のやうな桜ばなパンダ保育所いま昼寝中

● 梅内美華子 選

里帰りしたる実家のカレンダー 一朗とだけ書かれている今日
若者がこぶし振り上げ歌に酔うあの日骸むくろが並んだホール
ナンナンの山に隠れるようにナンナンを売る赤いほっぺのウイグルの母子

● 大島 史洋 選

命じられ一村率いて北海道開拓に行きし明治の曾祖父
「貴方達は七十年前のわたしです」と言つて始める空襲体験
父を見てどなたですかと言う母に聞こえぬ父がにっこりうなづく

● 岡井 隆 選

そつくりの一步手前で誇張するだから浮かびくる画えの迫真性リアリティ
ゆふさりのキツネノカミソリの朱あけの色だまされてもみたいやうな退屈
おのが世を楷書のように生きし父ルビのごとくに寄り添いし母

● 栗木 京子 選

手術後の妻に代りてスーパーへ一円玉がみるみるたまる
九条の国から来たと地図を指し留学生活スタートさせた
空想を逃がさぬように目を閉じたわたしの頭蓋は鳥籠になる

(選者五十音順・題詠・自由題の順に掲載)

東京 北條 忠政

宮城 根本由紀子

徳島 橋本 成子

東京 中山 一朗

宮城 阿部みゆき

茨城 高橋 悦子

東京 森田小夜子

神奈川 松原 佳江

神奈川 川上 恵子

兵庫 大村 博子

茨城 有路 利子

茨城 小田倉量平

愛知 宮地 聖造

東京 川崎 和枝

兵庫 村津 初美

● 小池 光 選

野球帽まぶかにかぶる少年のところに一樹しらかばの立つ
『第二の性』を何度も繰りしこの指で日々の米研ぐ家族のために
びんつけの香りまどえる力士来て郵便局はぱつと華やぐ

香川 藤沢 勝広
埼玉 山田 政代
愛知 江崎ヤヨヒ

● 小島ゆかり 選

マラソンのスタート前の群れの中必ず一人勝者が交じる
あきなつはるみたり子産みき胎内にいま育むはふゆの風の子
空想を逃がさぬように目を閉じたわたしの頭蓋は鳥籠になる

千葉 毘舎利道弘
岐阜 栗田三千枝
兵庫 村津 初美

● 三枝 昂之 選

「一」のみで七十二頁 諸橋の偉業しづかに図書館の書架
それでもみな弾んでいたつけ戦時下のドッジボールは手縫いのボール
汐風がページをめくる次の章港のカフェに君を待つ午後

富山 小林 圭子
茨城 飯塚はるみ
神奈川 川崎 力也

● 佐佐木幸綱 選

「一」のみで七十二頁 諸橋の偉業しづかに図書館の書架
騎乗してレッスン開始待つ間馬から伝わる生きる喜び
草原のキリンのやうだ陽炎をスローモーションの少女がわたる

富山 小林 圭子
東京 矢ヶ崎真木
愛知 安川 道子

● 篠 弘 選

一人でもひとりではないと答辞よむ原発村の少女の卒業
手の窪み木の点筆に赤くして初の点訳憲法を打つ
美しい物を見るといふ宿題を出されし少女と仰ぐさそり座

福島 松浦よし子
福井 杉崎 康代
愛媛 前田 充



● 染野 太朗 選

夏の日の稲刈り終えし祖父と入る一番風呂の湯の痛かりき
両の目を失明せりと代筆の手紙読み終へきつく目を閉づ
春からは振り込みのない通帳を開いて閉じてくりかえす午後

高知 川上 理恵
東京 高梨 守道
鳥取 林 美奈子

● 玉井 清弘 選

「二」のみで七十二頁 諸橋の偉業しづかに図書館の書架
籠を腰に早苗の補植する翁つい「お父ちゃん」と呼びそうになる
閉館を決めし今夜は半世紀の宿帳いだき眠りにつかん

富山 小林 圭子
岐阜 吉田 節子
兵庫 藤原 町子

● 永田 和宏 選

ひとり泣くことはできても一人では笑へないよと病む友の言ふ
「デモに行く」会のなかばで立つ人に会費をもらおう幹事のわたし
哀しみはいっつ知るだろう幼子は母の棺の前にて遊ぶ

長崎 小笠原富美男
神奈川 古田 香里
福岡 市川登美榮

● 馬場あき子 選

一人ではないのだ そんな気がしたら大丈夫だよ 弁当を食む^は
理学部の軋む階段その奥に恐竜の骨静かに眠る
消ゆる日のあるのだらうか広辞苑にも和英にもある「銃後」「玉砕」

東京 萩原慎一郎
北海道 伊藤 哲
静岡 野島 光世

● 東 直子 選

飛魚を一匹買ってバスに乗るうしろ姿の母を見ており
片方の靴だけになり母さんがあの日見てゐた菜の花畠
鳴く声の他は全てを売り尽くす豚頭並ぶ公設市場

三重 秋田 彦子
千葉 魚谷 蓉子
福岡 原 憲子